戦争を知らない世代へ㊾鹿児島編

特攻基地

体裁：軍事

内容：戦日本的特攻基地

創価学会青年部反戦出版委員会

第三文明社

戦争を知らない世代へ㊾
特攻基地

昭和54年7日25日　初版第1刷発行　定価1300円

編者©　創価学会青年部反戦出版委員会
発行者　栗生一郎
発行所　株式会社　第三文明社
郵便番号　101 東京都千代田区猿楽町2-5-4
振替　東京5-117823　電話03 (294) 8731(代)
印刷所　凸版印刷株式会社
製本所　株式会社 星共社

1979 Printed in Japan　0036—7049—4438
落丁・乱丁本はお取り換え致します

戦争を知らない世代へ㊾鹿児島編

特攻基地

創価学会青年部反戦出版委員会

第三文明社

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

発刊の辞

〝特攻〟という人類史上、類を見ない戦争体験。多くの若者がこの鹿児島を基地として、戦場へ飛び立っていった。

多くの青年と語り合い、マスコミの報道に目を向けるとき、〝戦争〟ということばは、私達の身の回りに〝受験戦争〟〝交通戦争〟とか過酷な状況に陥る代名詞として使われている傾向がある。しかし、最も非人間的行為である罪もない多くの人間が殺され、殺し合うという〝悲惨な顔〟を私達は決して忘れてはならない。

しかしながら、戦後三十四年を経た現在、その戦後の歴史のなかで、いわゆる〝戦争を知らない世代〟の人達が国民の過半数を越え、戦争への意識そのもの、そして戦争を表す言葉としてよく知られる〝大本営〟〝鬼畜米英〟〝学徒出陣〟〝特攻〟といった言葉も、ややもすれば現実感のない風化されたものとなりつつあるのもまた事実である。

今回、刊行された鹿児島編ではこれまでの多くの被災体験集と異なり、戦争という大きな渦の

中に飛び込んでいった特攻隊員に証言を求めた。

それはもとより特攻が生還できない作戦であり、戦争の加害者に立った側の異常な歴史の流れであっただけに、この事象を単なる〝時代の産物〟として捉えてはならないと思う。戦争は人間の生命尊厳の対極にある。そこに横たわる生命を手段として、人間と人間が殺し合う極限の悲惨さを私達は知っていくべきであると考える。

私達青年部が推し進めている平和運動は、生命の尊さを知り、その尊厳の思想を後継していくことを出発点としている。

この出版を機にこの戦争体験を私達が真摯な姿勢で語り伝え、国境を越え、全世界の友とスクラムを組んで平和運動を広げていく足がかりとなることを願っております。出版に協力してくださった関係者諸兄に心からの感謝を表するものです。

昭和五十四年六月六日

創価学会青年部
鹿児島県青年部長　安川　茂

目次

発刊の辞

一　鹿屋基地

神雷桜花隊員……小城久作　9

二　国分基地

部下を犬死にさせたくない……江間　保　37

無我夢中で敗戦処理……森山勝文　58

忘れ得ぬ飛行長の言葉……久原　滋　66

三　知覧基地

砕かれた人生……窪川敏郎　87

雲の墓標……板津忠正　102

涙ににじむ戦友の遺髪……丸田正人　109

愛機の尾翼下に穴……青木健児　122

終戦二日前の出撃……乾太一郎　133

かえらざる青春の日々……吉原利徳　139

「私も乗せて！」……三宅秀子 154

四　万世・鴨池・各地基地

散る桜残る桜……橘　保 165
よろづよに眠る英霊……森　利保 176
神風特攻隊員の真情……長峯良斉 184
慟哭の航空記録……三井勝憲 209
大空へ……浜田　悟 225
語り継がん子らのため……東條清二 234

五　特攻艇震洋

ベニヤ板の新兵器……荒井志朗 255
暗黒の海に散った友……上村信雄 270

鹿児島と特攻基地

あとがき

一　鹿屋基地

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

神雷桜花隊員

小城久作（55歳・自営）
大正十三年富山県に生れる。昭和十六年土浦海軍航空隊丙種十期生。海軍兵曹。昭和二十年四月鹿屋で特攻作戦に参加。数少ない桜花隊。戦後、鹿屋市野里町山下と茨城県鹿島町光神ノ池に自費で「桜花碑」を建立。

神雷部隊桜花隊員として鹿屋市野里町山下の野里小学校に出撃まで駐屯していた時の思い出を綴って下さらないかとの申出を受けたのですが、終戦より三十数年も過ぎた遠い日々のことでもありますので、辞退致しましたが、たってのお願いとの言葉を戴き、ペンを取って書いて見ることに致しました。なんと言っても三十数年前のことで、期日その他で思い違いや不確実な点もあるかも知れませんが、お許し戴いて、過ぎし日を脳裡に浮かぶまま綴って見ることにします。

神雷部隊の編成

神雷部隊は、戦局も悪化した昭和十九年八月中頃、日本海軍航空隊操縦員の内から極秘に募集、十月一日付をもって茨城県百里原海軍航空隊で編成され、十一月七日茨城県鹿島町光の神ノ池海軍航空隊に、神雷部隊基地隊本部を設置して隊員の錬成を行いました。

神雷部隊には、桜花隊と攻撃隊並びに戦闘機隊があり、その任務は次の様になっていました。

まず桜花隊員は編成に先立って、全日本海軍パイロットの中から独身者の次男三男が集められました。彼らに極秘の秘に現時点の悪化する戦況を説明されたあと、秘密新兵器の概容について話され、「国家存亡の時であるので、君等の中からこの秘密新兵器で一命を国の為に捧げてくれるパイロットはいないか。今海軍では必死の新開発兵器特別要員を募集している。参加を希望するパイロットは人知れず三日後に自分の名を書いて士官宿舎の空き室にある白い箱の中に入れて戴きたい」。

身をもって国を救わんと、全国海軍パイロットの中から秘密裡に志願して集まった必死隊員からなる集団であります。

桜花隊員の任務は小型機を操縦して敵艦船に体当たりすることであります。まず一式陸上攻撃機（双発）を母機として、攻撃機の腹の下に小型飛行機を懸吊して行き、敵陣近くなると、桜花隊員が母機から口型の乗入口を通って、懸吊してある小型飛行機に搭乗、敵艦船との距離一万メートル、最低高度三千メートル上空で母機より離れ、敵艦船に向かって発進しロケットを噴射しつつグライドして体当たりするわけです。

体当たりする小型飛行機とはどんな飛行機かといいますと、攻撃機の腹の下に懸吊できるきわめて小型の飛行機であって、飛行するための原動力（発動機）はありません。本来、エンジンを

取り付ける機首の部分には千二百キロの爆弾を取り付け、胴体には操縦者がやっと搭乗できる操縦席をもち、胴体片翼約二メートル、全幅五メートル、全長約六メートル。座席の後には加速推力用の火薬ロケット三筒内蔵する、飛行機の形をしたグライダーの様な爆弾飛行機です。ひとたび母機を離れ発進すれば、絶対パイロットの生還は無く、又再度のやり直しもできない恐ろしく粗末な木製の空飛ぶ棺桶でありましたが、戦争末期とあってはいたしかたなかったのでしょう。

攻撃隊は陸上一式攻撃機の腹の下に桜花機を抱いて敵艦船に肉薄、桜花機発進のあと基地に引き返し、また次の特別小型機（桜花機）を抱いて戦場へ決死攻撃をする部隊飛行のことを言い、神雷特別攻撃隊と名称しています。

神雷直掩戦闘機隊は、桜花機を懸吊した攻撃機を敵の戦闘機より決死をもって守り、攻撃隊が敵艦船上空に到達せしめる様義務付けられた、特別戦闘機隊のことであります。

戦友から渡された片身の財布

神雷部隊が昭和二十年一月十八日頃茨城県鹿島町の神ノ池基地を九州方面に展開戦闘準備についた時私は、神雷部隊に全国から桜花隊員として志願し、集合して来るパイロット達に桜花機の操縦方法を指導するために、基幹員として残り、神雷部隊の後続隊員養成を致しておりましたが、沖縄作戦により私達約三十名は本隊の後を追って昭和二十年四月十四日、南九州鹿屋航空隊に向

かいました。

ダグラス二機に分乗して着陸したのは午前十一時頃だったと記憶しています。空は青く所々に白雲が散り飛行場は縁一色で芝は若芽を出し、とても戦場とは思われませんでした。ダグラスより降り立ち私達は近くにいた整備兵に神雷部隊の宿舎はどこかと聞くと、「滑走路の端から坂を下りると野里小学校があります。宿舎はそこです」と教えてくれました。

簡単な身の回り品を入れた落下傘バッグを持って教えられた方向に歩いて行くと、飛行場端に一式陸攻が六、七機、零戦が六、七機で列線を作り、見なれた非理法権天と南無八幡大菩薩の大幟りが立っているので、訓練飛行でも終わって列線を作っているのだろうと思いました。私達が話し合いながら近づいて行くと、鳥取県の第二美保空教員から神雷桜花隊、共に一年二ケ月一緒に暮した懐かしい真柄、竹下や田村、川上、町田、山崎、鈴木、前田と第一次に出撃した桜花隊員約三十名ばかり。思い思いにキャッチボールや相撲を取る者、また犬と戯れる者、食事をする者と相変わらずの搭乗員の気ままな姿が目につきました。彼らも私達の近づくのに気付いたらしく手を上げ、「君達もとうとうやって来たか。元気で後から来いや。自分達はこれから出撃するのだが空襲を受けたので一時出撃が遅れた。後来三途の川は話をつけておくから」と言いながら食事やその他の遊びを続けていました。

私達は彼等を見送らずには宿舎に行くこともできず、手回り品を入れたバッグや小荷物を一ケ

所に寄せ、その日の出撃者を見送ってから宿舎に行くことにして、弁当の残りやお菓子を芝草の上に広げました。真柄君や田村君に「今飛行服を着ている者全部出撃者か」と聞くと、「いや桜花七名と爆戦六名だ」と答え、そして鈴木や前田を呼んで「おい甲板割しっかりたのむぞ」といって、私達に、桜花隊員の一部の隊員がなぜ零戦に五百キロ爆弾を搭載して爆戦特攻に切り替えなくてはならなくなったのかその理由を説明してくれました。

その理由は、三月二十一日の桜花隊の第一回攻撃で桜花攻撃が敵戦闘機隊に戦場到達するまでに落ちて母機と共に追撃されたので、また、爆戦特攻機によって敵航空母艦の飛行甲板を破壊し敵戦闘機が多少なりとも発着不自由になった所を桜花機をもって爆沈するという戦術に切り替えられたとの事であった。一般特攻隊員の操縦技術では、戦果の期待が薄くなったので、一部隊員を一般特攻隊員の倍の五百キロ爆弾をもたせて出撃させることにしたそうです。そして、「俺が甲板に飛びこんだらどんな穴があくだろう」「後から来る田村や真柄が必要なくなる程の敵空母に損害を与えてみせる」などと腕自慢する者や彼らの磊落な高笑いが続くこと一時間の後に、彼らは敵艦船を求めて南溟の空の雲の中へと飛び立って行ったのです。

この時の私の目に焼き付いていたのは、自分も死は覚悟はしているものの戦友の必死の出撃を初めて見送った感激よりも、むしろ己れの心が彼らの時点までまだ成長調整ができていない自分を知った驚きです。

では彼らの出撃の様子はと言えば、彼らは隣村の祭か楽しい二、三泊の旅行にでも行く様に、又移動訓練飛行に飛び立つ様に、声高らかに「それではお先にありがとう。さようなら」と手を打振って機上の人となり、何の気負いも感じられない雰囲気でいそいそと出発準備をしているのです。

やがて爆戦隊の布施兵曹や中根、前田等六機の零戦が五百キロ爆弾を腹に砂煙りを上げて離陸です。時々見送りの我々の方を振り向き頭を下げにっこりする顔が見えます。それもつかの間、高度を取り飛行場上空で最後の別れのバンクを打振り南の空へと飛んで行きました。地上では、桜花機の出撃です。陸攻はエンジン調整運転で桜花隊員は母機の風防ガラスを磨いたりしています。やがて発進の命が出たのか彼らは飛行機内に乗り込みました。姿が見えなくなり一刻が過ぎると、陸攻（母機）の天蓋から彼らは上半身を乗り出し、首には白のマフラーを靡かせ大きく手を振って、微笑を浮かべ、時々なにか大声を出しては手を振る姿は「先に行って待っているぞ。ありがとう。では靖国神社での再会を」と言っている様です。母機が地上滑走し彼らの姿が機内に消えるや、機は離陸し、戦場へ飛び立ちました。

神ノ池を出発して五、六時間しかたっていないのに、私の周囲や見るもの聞くものが一変しており果たして自分は皆について行けるのか不安になっていると、第一次の石橋兵曹や岩本、森、中西中尉等に宿舎に行って休もうと声を掛けられました。あらためて再会を喜びあい重い足を引

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com